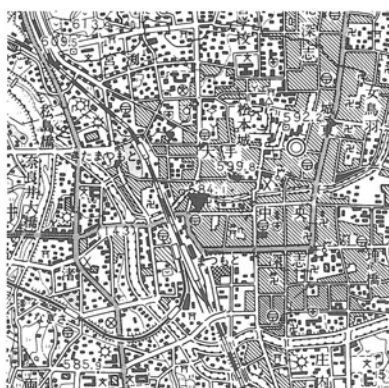


長野・松本城下町跡伊勢町
まつもとじょうかまち いせまち

- 1 所在地 長野県松本市中央一丁目
- 2 調査期間 一 一九九六年(平8) 二月～一九九七年一月、
二 一九九七年八月～一〇月
- 3 発掘機関 松本市教育委員会
- 4 調査担当者 一 神田訓安・高桑俊雄・村田昇司
二 竹内靖長・長橋重幸・村田昇司
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(松本)

伊勢町は、親町三町・枝町一〇町からなる松本城下町のうち、本町から西に分岐旧野麦街道の起点となつた枝町である。市街地の再開発事業に伴うこれまでの発掘調査や文献上の記録から、町屋の形成は一六世紀後半の小笠原貞慶による

城下町整備まで遡るが、藩政時代を経て今日にまで伝えられてきた町割は、一七世紀前半の小笠原秀政の整備によるものと考えられている。

一 第一次調査

調査地は、城下町絵図では町屋裏手の浄林寺域にあたるが、確認された四層の生活面からは建物・土坑・ピットなどが検出されたものの、寺院に関わるものは見出されなかった。代わって明治時代に旧寺域に設置された旧開智学校に関わると考えられる遺構が第二検出面において検出された。

木簡は、第二検出面の土坑四(廃棄土坑)から六点、同面の遺物包含層から一点、計七点が出土した。土坑四は、南北六m東西六・九m深さ〇・六mを測る隅丸方形の大形廃棄土坑である。木簡のほか、覆土中からは陶磁器、木製品が数多く出土している。

二 第十六次調査

この調査では、伊勢町町屋の背割溝である北蛇川を確認したほか、一八世紀の生活面を中心に鍛冶関連の遺構を多数検出し、鍛冶職人の居住が推定された。また、一六世紀後半の生活面では一七世紀以降とは異なる町割の様相が窺え、遺物にも高級茶器や刀装具が含まれている。従って伊勢町の形成初期は必ずしも町人地に限定されていた訳ではなかったと考えられる。

木簡は、形成初期にあたる第三検出面(一六世紀後半から一七世紀

前半まで)の土坑二九から一点、同面の土坑六から二点、第四検出面(一六世紀後半)の廃棄土坑一一から三点、同面の溝状遺構一から一点、計七点が他の木製品とともにまとまって出土した。土坑二九は円形ないしは隅丸方形を呈すると考えられ、この遺構とともに直線状に連なる二基の土坑が近接する。いずれも内部に栗石状の礫が多量に見られ、建物の礎石跡の可能性がある。土坑六は焼土面で、周囲に炭・灰が散在していたものである。土坑一一は礫が多量に含まれる径五〇cm内外の円形土坑で、建物に伴う可能性もある。溝状遺構一は幅〇・八m長さ六mで、東西に走るものである。

一 第一次調査

土坑四（第二検出面）

- (1) 松本尋常高等小学校
女子部 \square 長 \square $\left[\begin{smallmatrix} \text{れ} \\ \text{カ} \end{smallmatrix} \right]$
第二 \square 年 \square $\left[\begin{smallmatrix} \text{学} \\ \text{平} \\ \text{民} \\ \text{力} \end{smallmatrix} \right]$
・
○
「
弥 吉野山」
 $98 \times 23 \times 7$ 011
- (3) 松本
桂山 \square $\left[\begin{smallmatrix} \text{行} \\ \text{力} \end{smallmatrix} \right]$
 $85 \times 40 \times 1$ 011
- (2) 富 \square $\left[\begin{smallmatrix} \text{器} \\ \text{力} \end{smallmatrix} \right]$
 $(135) \times (34) \times 5$ 081

- (4) $\square \begin{bmatrix} \text{皮力} \end{bmatrix}$ $(124) \times 26 \times 1$ 081

- (5)  $85 \times 20 \times 1$ 011

- (6)

- 156×37×8 051

第二檢出面遺物包含層

- $$(7) \quad \left[\begin{array}{c} \square \\ \square \end{array} \right] \quad (187) \times 34 \times 4 \quad 081$$

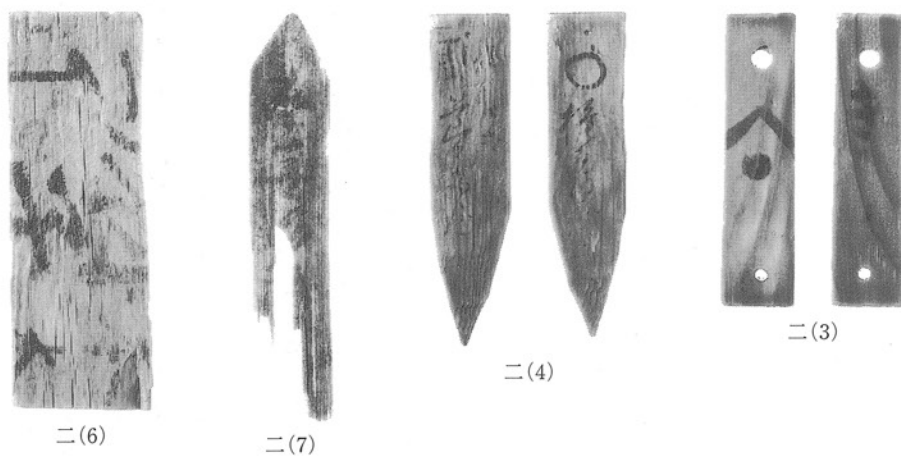
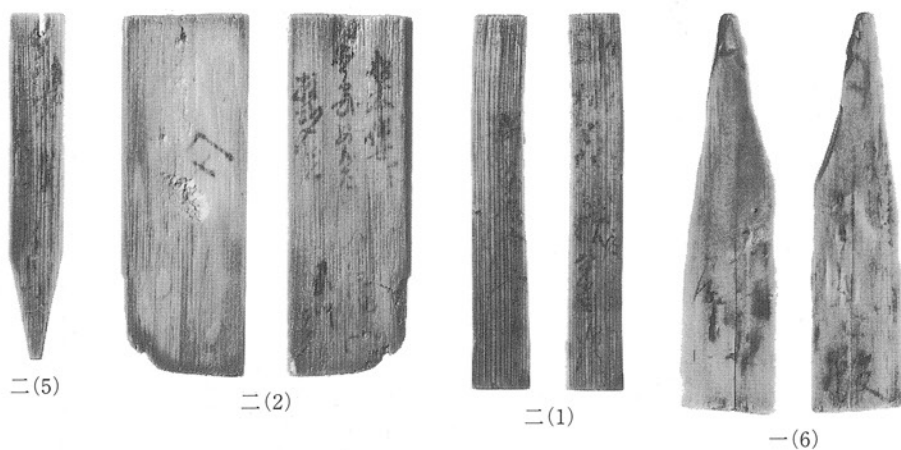
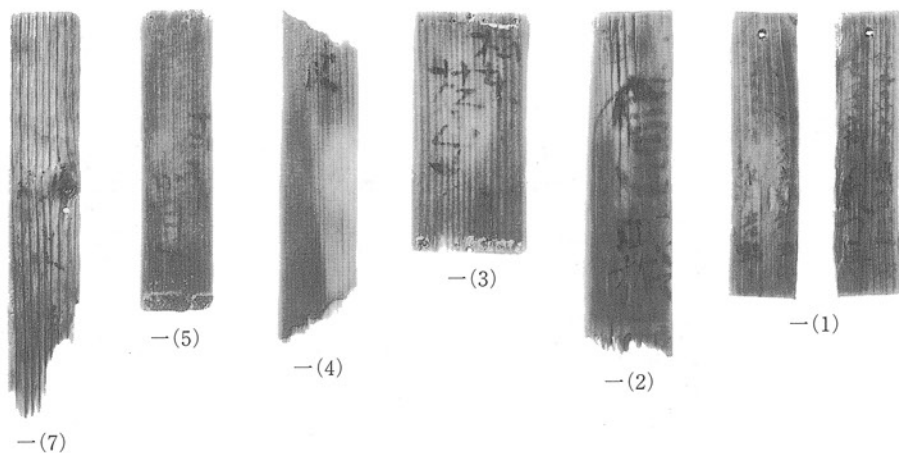
(1)～(6)は、明治期の旧開智学校に関わるものと考えられ、(1)(2)はその記載内容から学校内で使用された木札類と推察される。(3)～(6)は荷札木簡などと考えられよう。なお、(6)の裏面三行目の文字は、「展」または「食」の可能性がある。

二 第一六次調査

土坑二九（第三検出面）

- (1) 上松□□□様 米田源次
新茶拾斤入□□

2006年出土の木簡



土坑六（第三検出面）

- (2) ・「松本伊せ」町カ」
「相かりひカ」
「ぬ」
拾式

武州
庄エ門」

・「
〈×

196×69×8 011

- (3) ・「○き○」

・「○〈●○」

128×32×8 011

土坑二（第四検出面）

- (4) ・「○〇権蔵」

・「九月六日
吉道中」

178×43×5 051

- (5) 「
新□村
組頭

埴科□弥左衛門
六郎左衛門
弥左衛門」

174×28×3 051

- (6) 「
「子」本

(99)×288×10 081

溝状遺構一（第四検出面）

- (7) 「南無阿」弥陀カ」
「×

(215)×35×1 019

第一六次調査出土木簡は、松本城下町跡出土木簡でも古い段階に位置付けられるものである。(1)～(4)は形態や記載内容から荷札木簡と考えられる。(5)は人足に関わる札。(6)は建築部材や容器などの一部であろうか。(7)は上端を尖らせる。内容からみて、笹塔婆の上部と考えられる。

9 関係文献

松本市教育委員会『松本城下町跡本町第三・四次、伊勢町第一四一七次―平成九年度試掘調査報告書―』（松本市文化財調査報告一三二、一九九八年）

（竹原 学）